



言  
松露庵道學  
完



皇政 10

戊午年一誠筆

七十二歳

年多川や歌子あとも花の春

松露道人



松露道人の誠筆

梅雨くや歩井のあつとめたか  
おねしと



三つあつた

舞臺舞踊子のりあり在りて  
海子の歌と海苔子限るる子  
鏡の目と思ひおきたりゆふ  
花咲く人子到りて守の犬  
盛るる子より限あり花七り  
喉満し花子母を言ふ夕や  
舞の山外子驚おれ一里の南  
花咲めと花子短の志原一科  
又る子より花子一花の山  
花七りより花咲く新くを  
浴く歌へぬとえなく事舞ひを  
地を五天をあらると時雪は舞を  
海山と遠くはる月や舞ひを望

上野田宮 白羽  
大宮 梅田  
ぬす 柳島  
四宮 可美  
上野宮 初二  
上白井 五島  
沼田城内 一鳥  
江戸 貴家  
口 柳岸  
口 珍鏡  
沼田城内 葦足  
沼田城内 赤十  
口所 連城

舞ひを望みありて命を命  
中産舞や如風雲を舟而帯  
つるふしや舞子千のゆき子舞の真  
千海雲やその花のまよぬく  
舞のりや池よちとひしつる  
志舞子よとてその物もあつた  
古の舞子古の舞子あつた  
つやよひき

山吹や花とておけるはま蟹  
善徳や花とておけるはま蟹  
善の舞子風曉をよと録ひを  
山吹や花とておけるはま蟹  
つるふしや舞子千のゆき子舞の真  
善徳や花とておけるはま蟹

江戸 仙来  
新谷 仙来  
上白井 ト二  
沼田城内 稲石  
江戸 珍鏡  
上白井 梅儿  
沼田 樊圃  
江戸 珍鏡  
上野宮 た本  
沼田 不萬  
上野宮 初二  
ぬす 女美  
上白井 梅儿

覺不を快く劇子志くく小結一子留  
 春の世中その長閑さくまらむに  
 花守の終もぢいむも弥生世留  
 出たつとつあふ寂寂な舞女よむか  
 山吹や遊てもあかハ 名 の 色  
 山吹の舞子つらあはれはるま  
 海より中もえつるは洗ひ衣  
 う海へくく梅をそくくか能か  
 若中の中張子土橋くく川邊り  
 名屋もえくくちくく小結哉  
 可憐いのでて笑りくく春中か  
 春の世中や少くく歩む結衣  
 日 歸りの 道 おもくくく結衣  
 留田 樊園  
 江戸 可名  
 江戸 日暮  
 江戸 如静  
 江戸 井二  
 江戸 如柳  
 江戸 里乙  
 江戸 月指  
 江戸 百里  
 江戸 望来  
 江戸 如静  
 江戸 燕交  
 江戸 曉者

字も本も喰くく 弥生たえか  
 猫ハくくあを余くくゆい  
 卯の茶ねハ  
 何宗の名も遠りはるる山  
 清くく小なを帯くくつらあはれ  
 花見くくも十り流るる若葉を  
 道えくく 梅子樓のつらあはれ  
 二度ゆえに二夜娘くくく時  
 中やくく大空折もあるくく五徳時  
 禮くくくくくく 給くくの中  
 貴くくくくくく 殿のありや哉  
 清くくくくくくく 山吹  
 たりくくくくくく 喜山  
 只ありくくくくくく 若葉か  
 留田 樊園  
 江戸 可名  
 江戸 日暮  
 江戸 如静  
 江戸 井二  
 江戸 如柳  
 江戸 里乙  
 江戸 月指  
 江戸 百里  
 江戸 望来  
 江戸 如静  
 江戸 燕交  
 江戸 曉者



おろふ不脱子お母のひのり全  
は川ね魚被をきしむ人おても  
四五日の人の未きり中おれ矢  
角戸淑かき笑りぬり日植哉  
植をてきこめてお母を成りりり  
風を好ぬのちひや雲の岸  
るを化し風もあそむとの岸  
おちきか又おりり雲をさすの  
水並りか

そんりあそむしとちとあせ  
おろふ不脱子お母のひのり全  
は川ね魚被をきしむ人おても  
四五日の人の未きり中おれ矢  
角戸淑かき笑りぬり日植哉  
植をてきこめてお母を成りりり  
風を好ぬのちひや雲の岸  
るを化し風もあそむとの岸  
おちきか又おりり雲をさすの  
水並りか

とく  
新巻  
沼田  
江戸  
上向井  
とく  
江戸  
沼田  
江戸  
上向井  
とく  
江戸  
沼田  
江戸  
上向井

とく  
江戸  
沼田  
江戸  
上向井  
とく  
江戸  
沼田  
江戸  
上向井

うたの中おろしとのあそび  
おろふ不脱子お母のひのり全  
は川ね魚被をきしむ人おても  
四五日の人の未きり中おれ矢  
角戸淑かき笑りぬり日植哉  
植をてきこめてお母を成りりり  
風を好ぬのちひや雲の岸  
るを化し風もあそむとの岸  
おちきか又おりり雲をさすの  
水並りか

沼田城内  
とく  
江戸  
沼田  
江戸  
上向井  
とく  
江戸  
沼田  
江戸  
上向井

涼風の中の後世や  
空風や舟あを忍れハ船久  
不仙美ハ何のあらハ  
からぬ舟子  
指し風よふを  
翁あまよ  
已七の

秋の舟子  
秋の舟子  
秋の舟子  
秋の舟子  
秋の舟子  
秋の舟子  
秋の舟子  
秋の舟子  
秋の舟子  
秋の舟子

江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸

江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸

舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折  
舟一鏡や色子折

人近く小車  
人近く小車  
人近く小車  
人近く小車  
人近く小車  
人近く小車  
人近く小車  
人近く小車  
人近く小車  
人近く小車

江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸

江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸  
江戸







神代卷

あ厚甲破の折つ花あき  
安也もともたふはと皆返る  
つらりままも原をまゆみ  
かきりつた金川流るか  
あはれおとあふも人のあき  
親も子も命をいぬ  
実のともおとあき  
あはれまも原の人もあき  
あはれまも原の人もあき  
あはれまも原の人もあき

江戸 嵐六  
ぬき城内 良喃  
口 教民  
沼田所 秀路  
あきあ 知こ  
江戸 早守  
二のう た武  
沼田城内 一美  
口所 美介

川をうみ 藤をうみ  
藤をうみ 藤をうみ  
あはれおとあふも人のあき  
親も子も命をいぬ  
実のともおとあき  
あはれまも原の人もあき  
あはれまも原の人もあき  
あはれまも原の人もあき

江戸 梅吉  
沼田 真介  
江戸 美介  
沼田 秀路  
あきあ 知こ  
江戸 早守  
二のう た武  
沼田城内 一美  
口所 美介

許しなるといふもやぬくめを  
科もあれ身のまゝや候 冬  
たふ馬や力廿の席のなをいめ  
袴とんやさう山さうまかきま  
而飯をぬくを燈やおの目

江田橋 卜晴  
日所 五表  
三の倉 寛白  
江戸 嵐六  
三の倉 左武

中野

解つたや 春も一尺八家の業  
もち梅や冬一程の人喜用  
あまうと二りのるま本のまを  
君代や何あまがこも版の生  
解つたや 冬一程の人喜用  
破さふん 梅えうし 年口  
あまの生やま 梅つる 年口  
葉子 梅えうし 年口

江戸 種藤  
口 梅片  
ぬき 石高  
てし 一瓢  
ぬき 東葉  
口 梅片  
ぬき 石高  
ぬき 東葉

今の業やつうな 春の業あう  
解つたや 冬一程の人喜用  
もち梅や冬一程の人喜用  
あまうと二りのるま本のまを  
君代や何あまがこも版の生  
解つたや 冬一程の人喜用  
破さふん 梅えうし 年口  
あまの生やま 梅つる 年口  
葉子 梅えうし 年口

江戸 種藤  
荊芒 車米  
江戸 無交  
口 世厚  
口 月橋  
今あ 無  
江戸 可名  
江田橋 竹白  
江戸 樫圃  
江戸 箕あ

園

京都大佛殿田録

そのまをいふは 春の業あう  
戊申の春の業あう  
何れ一時的に 春の業あう  
江戸の業やつうな 春の業あう

多劫に及ぶ人々を救ふに西栗田の塔をたてて先之條塔  
塔の五重の塔をたててお國寺に南ち妙法寺といふも浮世の  
多劫に及ぶ人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に  
塔をたてて人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に  
塔をたてて人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に  
塔をたてて人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に  
塔をたてて人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に  
塔をたてて人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に  
塔をたてて人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に  
塔をたてて人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に  
塔をたてて人々を救ふに都へ入信法あり塔をたてて京師に

明くあまや塔も仰も

西方より

北東より

昔寛政十戊午年文也



寺日書  
簡土書

日賀木年法ト居

竹木の塔はたのふもあつた年かといふ如きの連流法今の  
を稱して鉄もは鉄も鉄を神足と云ふ竹子は燦々として人の  
塔一家のつとを幸に縁入る所とありて所を輝き土より法を嗣く  
功二年余年を以て其法の塔なりと身法の塔ありと文を述べて用ひて  
文子處る塔處年にもあつた年かといふ如きの連流法今の  
かかひといふもあつた年かといふ如きの連流法今の  
勤心して法も又風流あつた年かといふ如きの連流法今の  
建法を中書いふやありて先漢家文とて先漢家とて先漢家とて  
中書いふやありて先漢家文とて先漢家とて先漢家とて  
しとてと金馬門子遊事とて先漢家文とて先漢家とて先漢家とて

何よりと塔を近し中書いふ

本寺塔  
馬明  
圓

如文

柳子古今の名ありしと柳の如き先師乃身を解先分は露をとては風種四方  
 上折らまてたゆゆき子傳りも至所まうて後再び修そ又鳥鳴若くは  
 翻てより中二字を余ししりうを為支雙の友と文て柳の如き  
 遊ふるも耳あり六色のさじを遊色東都にあて附附所平家流と  
 又對教書所子梅を折るまの古柳は流るるの心でたて五を八はと  
 好まうて早雪の如き子文り柳も香雙老の香は子中すはらうて  
 柳先分より傳りれま僧也あへんと久ハも昔の余りれとおまむ雲の  
 柳色を如ひうて之をを和らうされハ子あまのあうりれの道ま  
 なく之を追えを和らう老分まうてんとあま子老如くわてをいあ  
 とも遠近の友ともわにゆまに実や急方せんハ屋赤一人方を建  
 既白しとま子とまたる如柳のまきくはあま命冥施のあまきを  
 流くあま子如をまき春のまらぬ花子入あんとあまのりまのま  
 柳より柳て流の二本にきてあまいと述す  
 柳子古今の名ありしと柳の如き先師乃身を解先分は露をとては風種四方  
 上折らまてたゆゆき子傳りも至所まうて後再び修そ又鳥鳴若くは  
 翻てより中二字を余ししりうを為支雙の友と文て柳の如き  
 遊ふるも耳あり六色のさじを遊色東都にあて附附所平家流と  
 又對教書所子梅を折るまの古柳は流るるの心でたて五を八はと  
 好まうて早雪の如き子文り柳も香雙老の香は子中すはらうて  
 柳先分より傳りれま僧也あへんと久ハも昔の余りれとおまむ雲の  
 柳色を如ひうて之をを和らうされハ子あまのあうりれの道ま  
 なく之を追えを和らう老分まうてんとあま子老如くわてをいあ  
 とも遠近の友ともわにゆまに実や急方せんハ屋赤一人方を建  
 既白しとま子とまたる如柳のまきくはあま命冥施のあまきを  
 流くあま子如をまき春のまらぬ花子入あんとあまのりまのま  
 柳より柳て流の二本にきてあまいと述す

流 澤 柳と柳の如き先師

西竹



定連

待友まのも久くくはあまのりま  
之名因山奇  
生まをま子

梅はく中を殿りくの葛文根を  
江戸  
坐泉

又東乃る子残りしりくをねり秋  
泉流

こを次忘れや五ふ子ハぬまに塚の守  
親  
子珠

刻ハ一棘ハ中をくはあまのり  
珍希

燈色乃生砂子遊あり見ハ  
有翠

若館や柳ハあまのりま  
蒼山

名のよやまをいふ之の務子思  
後立ちてちるまふ子し萩の花  
誰かそと取くの中に機の方  
有舞中垣根子流る物ほろき  
船子舟押かて行そみくら  
卯う川衣物ハ定しある内こも  
船兵と出仕るをそ船系が  
老て子にそあうしる花えらな

振鈴  
松楳  
柳條  
春冬  
素俊  
尺素  
杉南  
暮系

まろくく杉吹あれて麻の敷  
岸や草をいし夢子比まとい  
ぬれるや露もまもるれは  
うしりく夢子の友ある花えらな  
木おりわいしく白紙富士の形  
まふ子あをる眼も涙こつを  
室も取子一物まきりおのぬ  
夕しりや物悲しき人ハあまに  
土ふりぬぬのあはぬ田こく

爲勢  
芦洲  
卯木  
徐風  
玉笛  
至園  
芦帆  
世守  
玉秀

稚子啼て寝しゆり〜とてきりり  
 けしらの入りたれ〜秋の系  
 恨あはまき記秋和夏のゆ  
 糸の花と春討度のかきりり  
 本きまは八の月の夜をうり  
 是れもあはき家の伽の思うを  
 お〜ととる秋ゆり本きりり  
 旅あきやとるに船よりゆのゆ  
 夢〜夢方買われ来る鏡の夢

素足  
 流江  
 遠見  
 印例  
 糸田  
 舞足  
 親  
 連園  
 毛リ  
 靴船  
 紫曉  
 花遊  
 地  
 之也

古

若嶺の空電道ゆを朝日哉  
 乙名中家作る葉ハ気よ入るに  
 ぬきと秋や葉もゆもき明る  
 彼も是も皆女子あり田〜りる  
 夢〜ゆりや朝のさゆり蓮の花  
 夢の飛や書院子軸の音  
 中〜はれり子鏡のけり〜夏本五  
 麦中〜平牛あは里の女馬子  
 安〜〜子ゆり〜春の空ちり〜

といふ  
 白糖  
 瓜沙  
 南學  
 轡車  
 女  
 春味  
 似籠  
 歌  
 吟雲



る性と又笑りあし〜のきこる

吉州

蛙なく中ま錦この車

親節

猪くよに法告い白くと江戸の水

杜島

磨くの山よ遊り中車とまは

扇夫

去風巾涼き〜地風花む〜終

源之

山終来て人里ちうたつりりな

如忍

松子う〜ま子雪うけ〜夕暮 ぢ

急げ

物吉のき常子絶り〜夕暮の秋

雪雲

ま梅中盛人造の款の曇

吳川

るはく〜<sup>岸</sup>と〜<sup>山</sup>をまの 空

江戸

あ〜<sup>山</sup>の<sup>中</sup>回子人物子人

車亭

女の蒙と〜<sup>山</sup>喜田の〜<sup>山</sup>りな

村江

川終を歌〜<sup>山</sup>と〜<sup>山</sup>終まらな

忠忍

七終中と〜<sup>山</sup>まの<sup>山</sup>音春の色

東地

夜ゆ中観あり〜<sup>山</sup>日のゆり

東尾

岸のゆ〜<sup>山</sup>と〜<sup>山</sup>部〜<sup>山</sup>り

石川

曉の雲あは〜<sup>山</sup>り〜<sup>山</sup>子引

湖光

岸のふや終翹〜<sup>山</sup>宿のえ〜<sup>山</sup>屋き

一 西岸

柳をけし枝ぬとせむおち楳  
 一葉をさす葉結るる葉は  
 夕影のやまけふみみ子ものくさく  
 空菊中一葉のつぎ子娘よりり  
 ぬのぬ中州のまね白く結ふる  
 浦風の志しきし柳やおくおる  
 侍をさしきる月よえを魂ちり  
 花急の花子白打きりくお探毎  
 新中や海を風よおる色い

思魚  
 芦水  
 里遊  
 一遠  
 孤白  
 柳紫  
 白蛇  
 子茶  
 新泉  
 上野  
 子茶

無多昌と家子入りり松来奏  
 大とこちめてまつし雪の中  
 小叔ふて枕子近しきりく  
 五羽海うしぬつうと岸の原  
 みくく和や海にのおとる海者  
 おりふり葉等けり中鏡に  
 梅う香中ねとあひり味う  
 その羽の飛ぶまをり秋の  
 出代り中十年の物りるを

松来  
 体笑  
 月来  
 能技  
 里海  
 本面  
 本牛  
 久路  
 蛙言

なむくろくあまの秋の雲  
兼のまや志つるも遠くは  
美空つむ人よはるるを  
持仰より川よりもす  
秋まてもあま隈をく  
詠あまやまのあま  
横くしてはらく  
ゆゑ懐ねにあら  
昔藤本の雲をよけ

坂田 路波  
金井 五栄  
大八井 芝舟  
源七 大紅丸  
比田 舟里  
江戸 故吉  
仙臺 春磯  
志 芳志  
燕之

あまのあまの二色ハ  
春あまの風中  
雲の先ハ  
秋の笛原  
破戸  
紫玉の白  
三月の春  
秋

江戸 錦嘆  
大磯 春之  
物立 祖風  
江戸 河曉  
江左 江左  
結語 及河  
秋

の巻

白柳や西根草の之の蝶の中

平花

雨付

見し湖の舟子ある春やなごさ

はる春御月言灯籠花の妻

古比事した芭蕉のさよふ花の妻

咲きとふさうり花——糸はく

田舎をまのりて人き海

花をちりて雪水のなくと秋

尚園舎の蝶子石と花

花鳥

台

古巻

